

---

月 刊

---

# MéLange

---

Vol. 102

---



---

2015.05.24

詩と評論

---

月刊「Mélange」

Vol.102 2015.05.24

「月刊めらんじゅ」編集部

松尾真由美劇場。  
 テーマがはつきり姿をあらわすまで、詩の序奏はことばの動機を暗示しながら回想的に進む。そしてついに〈あなた〉が現れ、〈私〉が姿を見せると、官能小説のように、交情というエンターテインメントへとわたしたちを連れ込む。ことばは私を越えてどこまでも溢れ、そして私の盲目と乖離を通じて「私」から私の「晴れやかな不在」へと忘我のようにたわなに笑り、詩の全体は、微妙に賭ける執拗な起伏に結ばれほどかれていくことばの、妖艶

（松尾真由美「追記 晴れやかな不在に」部分 詩集「密約——オブリガート」より）

にわかに猥雑な水は流れ  
 疑わしいものとして  
 あわい座標がたゆたう  
 ふわふわと剥がれていく  
 いちまいの紙の悪意は翻り  
 かすかに引きつる焦慮のように  
 したしい身振りであなたを求め  
 いつも不慣れた素足の意図をからめ  
 沈みこんだ悴の姿の充溢へとあらたに向かい  
 私はみだらに軀をひらきやさしい応答を待っている  
 砂塵にまみれた無意味な生物となり聴覚を研ぎすまし  
 ここではあついで包容の余韻を築きむことができる  
 つめたく自堕落な接触の一面を拡げてもいる  
 くちづけをしたあとの暗がりの強度に迷い  
 だれもが密室ではぐくむ架空の荒廃を  
 なにかに埋めてしまっても  
 私にかたちを与える  
 あなたのあまい綻びに  
 まるで恋しい死者たちの眼差しの  
 さざめく痛覚を想っていた

な、変転の舞台となる。愛の行為や快楽が存在としてのどんな空虚や絶望を孕むとしても、ことばの肥沃がそれを救うと言わんばかりに。  
 男詩人なら、「氷った焔」の返答詩でも書くべきところだろうか  
 （詩集「密約」には詩集「氷った焔」を。）

氷った焔 清岡卓行

朝 1  
 きみの肉体の線のなかの透明な空間  
 世界への逆襲にかんする  
 最も遠い

2  
 微風とのたたかい

3  
 きみはすでに落下地点で眼覚めている  
 きみはすでに絶望している

きみの物語にはいない きみである動物の  
 不眠の 瞳が  
 きみの悔恨を知らない きみである液体の  
 滑走する皮膚と  
 そのための 幻覚の虹が  
 絶えず出発してしる現在の合図に  
 どうしてただちに滅されるのか  
 ——きみはそれを見ない  
 きみの鋭く 優しい 爪の動機であるうちに  
 きみの姿勢 きみの呼吸のなかから  
 死灰が層をなしている地球の表皮から  
 それらはどのようにして飛び去るのか

——きみはきみの絶望を信じていることを知らない  
 （・・・4以下略）

詩 & 俳句

残照／雑巾 ……………中嶋康雄 04  
 景色 ……………安西佐有理 05  
 花を喰う……………岩脇リーベル豊美 06  
 きらつく……………御着かおり 07  
 牛蒡の日々……………黒田ナオ 08  
 デッド・エンド……………千田草介 08  
 夏立ちぬ(俳句)……………高橋雅城 09  
 ふたりもさんにんもいなくなった春 ……………堀本 吟 12  
 山道／宙吊りの木……………野口 裕 13  
 ざんし ……………大橋愛由等 14  
 結末……………寺岡良信 15  
 十八の頃から ……………月村 香 15  
 盲の鳥 ……………有時秀記 16  
 背高キリン草 ……………福田知子 17  
 ちんぼ(頌歌)……………富 哲世 18  
 土・ふくしまの ……………上野 都 19

連載エッセイ & 詩評

ひと言詩評〈5〉……………富 哲世 03

〈詩人通りより〉21「ヨーロッパは大変なことになっています。」……………岩脇リーベル豊美 10

神戸詞あしび91「二人の詩人の生き方について」……………大橋愛由等 20

編集部だより★23／「月刊めらんじゅ」も102号となりました。今号も詩友たちの活発な表現活動をお伝えすることができる誌面となりました。読書会は、中堂けいこさんが、「ハンナ・アーレントについて」をテーマに語ります。わたしも参考図書として指定されたクリステヴァの『ハンナ・アーレント』（作品社）をかじり読みました。クリステヴァもアーレントもともにユダヤ系女性といういくつものマイノリティーを背負って思索するという共通項を持っています。クリステヴァは書きます。「女性とユダヤ人、アーレントにとってこの肩書は両方とも「政治的所与」だということ共通していたようだ。」〈大橋記〉

## ◆ 残照

中嶋康雄

事前調査が継続しており  
犬は犬の見えない首を気にしている  
どぶは雑草の根で詰まっている  
雑草の葉は郵便番号を妬んでいる  
郵便番号が数字の強みで  
年寄りを騙している  
木に登るトカゲの足が消えてゆく  
トカゲはポトリと地面に落ち  
少しだけまだ始まる

臆病な空回りが僕たちを囲み  
連休明けに通勤場所が消える  
僕たちはそれからどうしたらよいのか  
全然分からないので  
教えてくれないので  
うろろろしている  
潰れた中華料理屋の前を通り過ぎ  
早期撤退した居酒屋チェーン店の  
取り外された看板の跡の前を通り過ぎ

いつになったら先生に呼び止められるのだ  
ろう  
いつになったら

少しの残照だけが  
僕たちの顔を緩める  
のろのろとした商店街が  
よろめく杖にすがりついている  
少しの残照が  
もつとちよつびりの残照を残して  
退場する

## ◆ 雑巾

中嶋康雄

雑巾は彷徨い  
そして汚かった  
あらゆるしみが染み込み  
取れそうになかった

しみは大酒飲みで  
いつも不在の頭をかかえていた  
夜の雑巾は洗濯機を見上げた  
突然  
洗濯機が嫌な音をたてて  
まわりはじめた  
雑巾はちがうと感じた  
飢えた家が雑巾を囓った  
雑巾はなにも感じなかった  
汚れた糸が  
逃げてゆくのを放って置いた  
腐った邪を拭いたが  
机は新しい邪に覆われ  
ぬぐわれた古い邪は  
黴の間の黴のように  
雑巾の静寂にいつまでも居残り  
左右を向いても前後を向いても  
咳を避けるような距離が保たれ  
距離はそのまま居眠りをし  
雑巾は彷徨い  
いつまでも汚かった

## ◆ 景色

安西佐有理

雨のなごりを含んだアスファルトを踏む  
鳩の足の赤さには  
とびこむしかない  
花をわすれた暦の、いつくしみ深さゆえ  
広げた腕いっぱい  
麦の穂に揺れる緑であった記憶  
頭上すつぽりと  
さくらんぼうが放つ光で満ちていた記憶を  
まだ二の腕につめたい風に返しながら  
まぶたの裏で見ようとするのは  
いまこのときの、昼間の足音  
去年の閏月の猶予もまた  
(無かつたかもしれず)

(季節のなか模糊として)  
多重露光という、かつてあった  
幻のあとを追って

時間へ、時間へ  
近づいていく  
ゆらぎ、くりかえす叢の生い立ちに  
昨日とつぜん、聞きとつた言葉を  
白いボールがわりに立てて  
そのまわりをまわる―五月の儀式は  
豊穣の気配で野火を鎮めるためではなく  
還元の実である虚ろを  
なぎたおされた景色のうえへと  
呼びおこすために。

◆花を喰う

岩脇リーベル豊美

本日のシェフインのお薦めは  
西洋独活のスープと雛菊のサラダです  
女性接客係が  
白いテーブル掛けの席に案内する  
主菜をスカンピのマリネ風にするか  
茄子と仔牛をやわらかく煮たシチューにするかは  
慈雨の予感で決まる

雛罌粟 雛菊 三色堇

どれほどの花々が咲き競い食せられるのか  
聖霊が降りたつ祝日には森へ行きましょう  
五月の木漏れ日が射しこむ森深く  
大地が瞬時の完結を花として描き出す

蒲公英 赤摘草 勿忘草

風から生まれた女神は  
虹を紡ぐという使命を果たした  
女裁縫士はわたしのために冠りを編み  
それから襟巻きも作りました

ヤスミン イリス デイジー ローゼ

色彩と名まえの恵み  
極点に至る寸前にめぐり合い華めく  
尻頬に薔薇のタトゥーのあると噂された  
同室の女子留学生の羅典語訳を追憶したのです

菩提樹 芍薬 金盞花

蜜蜂は輪舞しながら花を訪ね  
仲間にその粉の在り処を教える  
綿毛が無い花唇が散る  
花を盗む 花を喰らいますよう

◆きらつく

御着かおり

青いビニールシートの空に  
蛍光灯  
その白くうつくしい光  
川底を通る  
tunnelでは  
桃の葉を重ね続けて唄をうたう女皇が  
待っている  
いつも

そこへの  
垂直移動は大抵エレベーターで  
こちらとあちらのドアには  
同じDNAだろう警備員が  
犬と人間と自転車や  
魚と文鳥  
それから  
数えることが出来ないものを  
乗せては

降ろしている

うかぶ  
しずむ

いつからか  
繰り返し  
川面はきらつく

水音は聞こえない  
そこは  
ひんやりとした空間

あとは孔雀だけなのにと  
囁かれ  
自転車を押している人は  
首をすくめた

すものあじ

あちらからこちらへ  
「順番なんですよ」  
と聴こえて  
川底に繋がれた舟は外れ  
また一艘  
流れていった

◆牛蒡の日々

黒田ナオ

深く深くと伸びていく  
 細長く浅黒いからだ 感じている  
 呼んでいる  
 肥えた土  
 湿る土の ぬくぬくとした重さ  
 くすぐるように抱き寄せ  
 べろべろとぬたつき  
 まさぐり  
 声にならない声をあげる  
 響きに合わせて  
 ひげ根ふるわせ  
 からだじゅうふるわせ  
 カエルや  
 目のないミミズ  
 手も足もないへびたちとからまって  
 土の両腕に抱かれたまま  
 くすぐす笑い  
 よじらせている

◆デッド・エンド

千田草介

真つ暗な淵  
 死者の呼ぶ声が  
 見えない道をつくっている  
 すり足をしのばせてたどる  
 硬い石壁に突き当たる  
 進みもならず  
 退くもならず  
 横に身を投げて  
 かの者たちの叫喚に  
 わが叫びを  
 呑みこませるしかないのか  
 畜生め  
 おれはまだ死んではない

◆夏立ちぬ

高橋雅城

立夏一 五句  
 光りあれ立夏にファインセラミック  
 妹のアンクレットに夏来る  
 立ちすがた母そっくりの立夏かな  
 階段の急なる途中なつが来る  
 雲を呼びアンパンマンが夏運ぶ

立夏一 十句 一意十様の試み  
 口紅のフランスなまりに夏立ちぬ  
 ドイツ語のなまり口紅あかすぎて  
 口紅は淡しこのたび夏迎う  
 くちびるに紅のさきやき夏立ちぬ  
 夏立ちぬ若き日ひとの紅あわし  
 淡き紅立夏の候に逝く人よ  
 口紅は季節の色と夏立ちて  
 口紅に合う服選ぶ人なりき  
 口紅や立夏に逝くは声しずか  
 紅ひいて立夏素直によるこぼす

二〇一四年度下半期まとめ 十五句  
 天牛を友と明治の本を読む  
 前衛は淫ら八月十五日  
 ここからはわたしあなたは秋になれ  
 しりとりをする少女へとこぼれ萩  
 きみはいま走る哲学ザクロ割れ  
 ここに俺ここに勤労感謝の日  
 霜月はちくわの穴の彼方から  
 のどぼとけ寒し極右の街にをり  
 霜夜宇津救命丸の小声たち  
 十二月柿の葉寿司が人情家  
 味の素なめてバカボン来る師走  
 ドーナツの穴のあたりに去年今年  
 冬座敷いろはにほへと母の留守  
 凧たいくつだけが知っている  
 眠気さすまたうぐひすを聞きてなほ



ヨーロッパは大変なことになっています。

岩脇リーベル豊美

「ヨーロッパは大変なことになっています／外から見ると／いつそう大変に見えるかもしれませんが」と、今年も始まってまだ浅い月に散文詩を書き始めたのはいいが、どうも詩にはならないまま五月も終わる。「Der Wonnemonat Mai 風薫る五月」と讃えられる五番目の月。die Wonne は歓喜や喜びといった意味で、風である der Wind とは言葉の成り立ちとしては関連はないと思うのだが、その喜びに満ち満ちたひと月が五月ということなのだろ。和訳されたものには漢語の「薫風」に拠る「風薫る」という夏の季語とともに呼ばれることが多いけれど、町からもそれほど遠くない森を散歩したりしていると、やはり五月は、温かみを感じ受した百花の繚乱、初夏というよりも本物の春という感のほうがある。

その写真を見ても当然のことながら、自分の頭蓋骨であるはずなのに、どこにどんな意味が隠されているのかは全くわからず、医師にいくつかの記号を読み解いてもらい納得したが、特定の事物を解釈するには特定の専門の修行が必要であるということ、思わぬところで言語や詩に当て嵌めて考え直す機会にもなった。

もうひとつの「仕方なく」は保険証がなかったからである。イースターの休みにヴェネチアに行き、復活の日曜日で混み合うリルト橋の上で家族三人感激とともにセルフイーをしていてる最中であつたと推察するが、その道の専門家と思われる方に財布を見事に掏られた。パスポートは忘れていったので無事で、交番での届出にも支障はなかったものの、本人にとっては大金と思われる額の現金とクレジットカード、免許証や保険証、また置いていけばよかつたと後悔する大学などのIDカードが幾枚か、そして最近頂戴した名刺やお守りなども一緒に掏られ手元に返ることも考えられず、悲しい旅の思い出にもなった。当初はイタリアに温まりに行き風邪を治そうとしていたのだが、途中積雪があるほどの寒波が来ていて、また自宅に戻ってからはカードの差し止め（クレジットカードは現地）や再発行申請等に奔走し、それに加えてドイツ連邦鉄道と連邦郵便も度重なるストライキに突入したため、保険証が届いたのは三週間以上経ってからであった。ここでも、ポストモダンの人間はすっかりカード情報管理の危険とストライキの影響に曝されていることを実感する機会となった。通勤途中ではまだ本物の春になっていない寒空のなか、来るか来ないかもわからない列車を待ち、風邪は治るどころか悪化し扱われてしまったのである。

強いように思う。五月祭が各地で催される。そのなかでも最も有名なものが、『ファウスト』にも描かれている4月30日から5月1日にかけての魔女の夜宴「ヴァルプルギスの夜」だろう。キリスト教伝来以前の土着の風習として、春の訪れを祝い、豊穣の女神マイアを祀ってその年の収穫を祈る祭りである。死者と生者もしくはは精霊が入り混じって、ついに春が始まるという歓喜の日でもある。マイポールを立てその周りを踊って祝うところもある。月刊『めらんじゅ』第102号のためのお知らせに主催者の大橋さんが書いていらしたが、「爽快な季節であるがために身心の不具合を起こすひとがい」るのも当然である。魔女たちが酒宴で大騒ぎをするからではないかと思う。

今月はエッセイというよりも近況報告のように、全き個人的不運を、特に意志や主張などもなく書き出してしまった。三月にひいた風邪を長引かせて、というのも、熱も下がりが咳もそのうち止むだろうと思いつながら通常どおりに日々を送ったり、旅行などにも出かけたりにいたところ、ひと月も放置したかという頃になつて、通常の行為にも支障を来たすような頭痛や内側の鈍痛を抱えるようになり、以前経験したことがある不具合だったので、仕方なく医者にかかることにした。どうして「仕方なく」であるかは、そうするしか他に治療の方法が見つからなかったからでもあり、いくつものネガティブな要因が重なって倒れにしか思えなかつたからでもある。病名は何のことはない、副鼻腔炎と診断された。その後発展して中耳のほうまで赤くなっている自己診断ではあつたが、コルチゾン入りのスプレーで治療しても、再びひと月ほど待つても、症状が好転するといった変化はなく、次の問診時には「もうよくなつたのか悪くなつたのか知覚できない」と返答して若い耳鼻科医に唸られた。そのため放射線科に廻され、なんとという器具であるかは知らないが、約五分のあいだにさまざまな角度から頭蓋骨の百に及ぶレントゲン撮影をされたのである。

こういった旅の途中の盗難は初めてではなく気をつけていたつもりではあつたが、それゆえに尚更今回のそれは想像以上に堪えるものでもあつた。戻つてから何人かのイタリア人女性と話したが、彼女ら自身も、自分の身は自分で守るという当然の帰結に回帰してゆくばかりであり、これはイタリアに限らず、欧州？地球？全般に通じる真理でもあるのだろう。エッフェル塔近辺の、またルーブル美術館での攻撃的なスリに従業員らが不安に陥り、閉館した日があつたということも後にニュースで知つた。

五月は歓喜に満ちた春の始まりである一方で、五月一日は労働者の日メイデー（メーデーと音写するのは非常に抵抗がある）でもあり、数少ない政治的法定休日の日なので、集会やデモ開催の活動する、少なくとも連想する人のほうがより多いであろう。この休日は国家社会主義ドイツ労働党NSDAPが政権をとつた1933年に初めて公休日と認められているが、戦後でも、労働者の自由と権利を守る象徴の日として存続している。私はこの労働者の権利を支持する者であり、自分自身も労働者以外の何物でもないと思つているが、この日を祝日とすることの正当性には懐疑ももっている。関連があるかどうかは知らないが、ヒトラーはこの「ヴァルプルギスの夜」に自刃し、その一週後戦争は終結する。今年の五月八日は70回目の解放の日となるのであつた。

「ヨーロッパは大変なことになっています」という書き出しは、フランス新聞社のテロ、ISに向かう若者たち、ロシア・ウクライナの緊張、ギリシャとEUの交渉、シリア難民船の沈没、ジャーマンウイングスの操縦士自らによる墜落などを踏まえて書こうとしたものである。炎症は回復に近いが、もう暫く女神と魔女の声聞きながら薫風を待つ。

◆ふたりもさんにも

いなくなつた春

堀本 吟

ひとが死ぬのは  
あつけないこと  
つらいこと  
ゆうべのことも  
あんなに陽気に  
おしゃべりして  
おやすみなさい  
までは  
ちやんと  
あなたはいった  
だいじなことは  
みんないつたわ  
さいごに  
ひとこと

おやすみなさい  
くぎるように

おやすみなさい

と、いったのよ  
そしてゆつくり  
めをつむつたの

わたしもいった

おやすみなさい

つづけて

さよなら

つて

いはずだった

でも

いいわすれた

いわなかった

その

さよなら

あなたもいわなかった  
その

さよなら

いわなかったことを

わすれない

いわなくても

よかつたの？

いま

きこえる

窓のそこから

あなたのこえが

わたしのこえになり

いいわすれた

さよなら

が

いわなかった

わたしのために

くりかえす

こだまになつて。

◆山道

野口 裕

糞を見つけた  
鳥ではない  
獣だ  
なぜ獣と分かるのだろう  
でもやつぱり獣だ  
昨日 夜半から雨になつたので  
おそらくその前の食事だ  
まだ濡れていて  
土色に光を跳ね返している  
大ききからすると鼠以上猪以下  
狸か鼬だ

想像してみた  
土混じりに食事を摂る野生動物  
土のかすかな甘みを感じる野生の舌  
壁土を食べる少女が出てくるのは  
南米の小説だつたつけ  
想像してみた  
食事の用意をしたのは♂で  
食事を摂つたのは♀だつた  
摂れば婚約を意味する土の香り  
誘惑と躊躇のシーソーが  
♀に舞踏を強いる  
♂は遠巻きに

舞台がそこで  
百億光年先に飛んでも  
何ら不思議はない  
置き去りにされた楽曲が  
私の耳に残る

今朝 雨上がりの木々の葉は

尖つたり広がつたり

空の砂時計となつている

◆宙吊りの木

野口 裕

その木は腰のあたりから寸胴切りにされ、四方八方から吊され立っている。切断面は人工池となつた水面に接し、水鏡は水と空とを貫く一本の棒を現出させている。だが、子細に見れば、わずかな水の揺れをかぶる幹と切断面の縁はただれ膨れて黒ずんでいる。ところどころは黴びてもいるようだ。どこからいつごろ切り出されたのか、今となつては分からぬ。内壁も外壁も汚れ放題となつているビルの吹き抜けを支えているかのような格好で、だが実際は内壁から伸びる埃のような頼りない無数の触手が樹冠あたりで辛うじて木を支えているに過ぎない。木が枯れずに生きているのは、触手からの栄養分なのか、切断面から

吸収される特殊な水の効果なのか。世間の憶測は絶えないがビルのオーナーは曖昧にはぐらかすだけである。

ある日私は、木に登りたいと申し入れた。オーナーは断るだろうと見込んでだが、以前にもあつた同様の申し出を拒絶していたからだ。

あなたは物語から逃げる気か、とも言われたらしい。だから今回は、断られたその後で、物語を詳しく尋ねるつもりだつた。しかし、オーナーはあつさりOKを出した。物語はどうなつたんですかと問いたかつたが、気が変わらぬうちに日取りを決めた。さて、どう登ろうかとあらためて木を眺めると、はなはだ難しい気がしてくる。人工池の水深はかなりあり

そうだ。試しに水べりから硬貨を落とすと、あつという間に見えなくなつた。溶けたのかも

れない。ビルの内壁から伸びる触手は心もとない。触手は、気まぐれだが、手の届く高さ

の内壁からも生えている。それを引つ張つて

みると、あつさり千切れ、千切れた後に蒸発し

た。木を支えているのだから、人ひとりぐらい

が加わつても大丈夫とは思ふのだが、木に取り

り付いた途端に触手はバラバラと木から外れ

て、気味悪い水面にふるい落とされそうだ。ど

うするか？ 考えている内にその日が来た。な

んとかなるだろうと、何の工夫もないままビ

ルに来てみると、木がなくなつていて。主を失

つた触手がだらりと、内壁の汚い飾りになつ

てしまつていた。ぼつんとたたずむオーナー

にどうしたんですかと尋ねると、これが物語

だよとさびしげに笑みを返された。

## ◆ざんし

大橋愛由等

厚切りベーコンの前に  
にが笑いと悔悟を置く

午前九時――

聖痕から抜け出た  
狸々蠅が  
ためらうことなく  
あなたにむかう

ためらいなくと言ったのは  
嘘かもしれない  
蒼とシアンの境目は  
尺寸目盛の竹定規によって  
慮るから

その慮りも  
ひと呼吸おぐがいい  
不全と不全を  
行き交いする  
あなたの

オドリコソウを  
視る一重まぶたに  
曇天が  
流転しているから

球形に  
緊縛されている  
午前九時だから  
そのしはがれは  
阿字と卍字を  
右顧左顧しながら  
自滅しそうでしない

好きな鉱物の  
話しをしよう  
きつと  
狸々蠅も  
あなたも  
「聖痕はジンジンよ」  
と言うに違いない

万象が  
鉱物化するまで  
阿字と卍字は  
踊り続けている  
だろうから  
このままで  
いようかよそうか

## ◆結末

寺岡良信

凧はもどかしげに  
午睡に寄り添った  
鑿が削ったものは一本の流木  
雨に抱かれた  
六月の裸婦を彫らうとして  
かなはなかつた刃に  
浜昼顔の悩みが翳る

官能に行きつかなかつたのではない  
陽炎にゆらめく  
いのちの結末を  
おまへは  
彫ってしまったのだ

潮騒も  
蒼穹の滴りも  
遙かに遡る風景

おまへの  
もうひとつの目が  
豊穣な肉叢のなかに  
流木を見てゐたのだ

## ◆十八の頃から

月村香

いつつもそうなんだわたしの知らないうちにわ  
たしが終わっていることを知らされる午後の雨  
音避けても耳につんざく初夏の嵐はさつき通つ  
た墓地の目隠しのレンガわたしの昼下がりがわ  
たしの恋人たちそれは汗フランソワーズサガンに  
似せた髪型ではもうその問題の解決にはならな  
い多くの女神たちが文学に現れるがみな美にし  
て結果わたしがひどく醜に見えるだけ丸襟のブ  
ラウスとワイシャツにアイロンをかけて流れる  
ラジオから曲を奪ういくつもいくつも新曲が発  
表されるので飽きないもしわたしに声というも  
のがあったら十八の頃からシャンソン歌手にな  
ろうとしたと思うわ



## ◆盲の鳥

有時秀記

まだ盲になる以前に、かの黒鳥が、鍵穴から見続けたのは、俗塵のなかで交わされる論議だが、その論議の主たちは虚しい主張の応酬と浅薄な中傷を繰り返して、悪びれることもない。虚妄の上に正義を打ち立てようとする論者たちの舌は赤く燃え、眼球は威嚇的に飛び上がる。しかし、かの鳥は、黒い羽を広げたとき、わずかに深い緑の羽も垣間見させながら、つぶやく。

「傷は私の褒賞か。鍵穴から飛び出して羽根に付着した塵は、死するものの汚穢であり、傷であるが、私の眼は、浴び続けた塵が堆積して、いままさに盲に至らんとする。盲の寸前に、見える光は、しかし、純正なロゴスを散乱する。いまわのきわの、それが私か」

「誰がその散乱を、言葉などという俗に翻えった語りに甘んぜよと言ったのか。とうとう盲となつたあかつきに、俗塵から遠く離れて、私は見るだろう。見えない深淵の父の声を見るだろう。聴こ

えない母の清流音を聴くだろう。俗塵の堆積した憎しみや論議に名を借りた中傷は、ばらばらに解体され、水晶宮に異なるイメージが宿るとき、ついに失明する。犠牲の盲の鳥。成就の盲の鳥。それが、私だ」。

暁に深い緑が宿る。黒い羽は抜け落ち、わずかに緑色を帯びていた羽も消え去り、盲の鳥は見る。盲の鳥は聴く。子音の原語。母音の色。そうして、それらをバネに離脱する。虹の、雲の、空の、幻のような奏での、向こうへ、確かな響きに向けて、離脱する。ヒマラヤの知恵から遙か遠く、上昇する離脱。地球追放の彼方に開き示される。わずかに白い人のようなアンドロメダ座のあたり。盲が開かれ、真正の鳥の人が羽ばたいて、繰り返し繰り返す。「声は子音で書く。色は母音で見る」。これがロゴスだとアンドロメダ座のあたりで、羽ばたきは羽ばたいた音で光る。

そのとき、共振した鍵穴は閉じられ、世界は保たれる。有限な孤独は閉じられ、世界は保たれる。

## ◆背高キリン草

福田知子

詩に向かつて身繕いしていると向こうからキリンがやってきてまだ水黒いから散歩に行くのは早すぎる蟻は咲いたばかりの黄薔薇に揺られて風の中切り揃えられたタンポポの綿毛から苦勞して刻んだ野菜汁に入れる菜の花揺れる洗濯物は濃密な風を孕みベランダから押入れへと夕べからの雨で濡れたシロツメグサに「夜に爪切つたらいけないよ」「夜に口笛吹いたら蛇でるよ」と告げられたのはこんな朝だったそういつもの明るい日差しの朝は小児麻痺の少女の私だったその子を母は毎朝手を引いて済生会病院に通った「樽本先生、マッサージしてやってください」いつもいつもマッサージばかりしにこんな晴れた朝も台風の朝もマッサージしに行くのだった「お願いですから、この子の足をなおしてやってください」少し気を病んだ瘦せた看護婦さんが「お母さん、泣かないでください、そんなに泣かないで……」といつも慰めていたこんな朝こんな時代に女の子たちは次々と攫われていった坂道でじゃんけんしたり缶蹴りしたり最初の一步をしたりして日が暮れるまで遊んだ坂道の下で寄せ屋さんのリヤカーに乗せられて殺されていたころされてしまった色黒の小さな一つ年

下の女の子「そう かわいいそうに ほん かわいいそうに……」と近所の割烹着姿の小母さんたちが集まっては井戸端で噂するそんな朝が続く「サーカスに売られていくと酔を飲まされるってよ……」手の先・足の先をいつもイライラさせている六軒先の小父さんは散髪屋さんから家に帰る途中で隣の植木鉢のキリン草に「働きに行つてきたよ」っていつも嘘ばかり言っているそれでも今朝は明るくて戦争から「一五年も経つたのだから」もはや戦後ではない「っていう掛け声に疲れているのだから……」手の先・足の先をぎゅゅと握りしめて黙つたままキリン草を見ていた「足の悪い子は子取りに連れていかれないよ」サーカスのかかる朝近所の小父さんに連れていかれた広場にはサーカス小屋の大きなテントがあった小さな椅子に座って空中ブランコを見上げ一緒に揺れくらぐらした何度もブランコと揺れてくらぐらした銀のミニスカートをつけたおねえさんも攫われた子なのだろうか……私はぎゅと攫われない明日の朝もお母さんと樽本先生のところにマッサージにいくのだから……サーカスを見ている隣に座っていた小父さんは誰だったんだらう……キリン草は背が高すぎて顔が見えないので今朝も思い出せないまま歩いている

◆ちんぼ(頌歌)

富 哲世

3 コジマテルマサ

1 ばつぶくどんのゆくへ。

病室のカーテンの上ではぼさつの後ろ姿のように立っている大きな樹の涼しい影が覆い被さるように時折落ちる鳥の影をカーテンに貼りつかせながら燭台の両手を差しのべて日のなかで揺れていました

『ありがとうございます。腹水と発熱が続いています。日ごとに体力が衰えていくのが分かります。すこし調子のよいときは、仁川のコンチエルトという喫茶店に行つて音楽を楽しみます。』

『音楽のように、言葉を紡ぎ出せばいいのにねえ、音楽とことばは、どこか隣同士でお互いを羨ましがっているのかなあ』

2 ちんぼ(コジリトモヒロ)

きんたまも  
ちんぼもあつた  
くさい屁も  
げつぶもした  
くしゃみもすれば  
下痢もした  
焦げる日のおい

キャッチボールもした

ラーメンを食い

牛乳を飲み

バイクが通り過ぎた

笑いもしたし

くやしがりもした

きみは

ぼくらと同じだった

もし生きていれば

拉致する林檎

林立する薬容器

霧吹き

缶ビールに

めがね、

腕時計

紙ぎれと

コジマテルマサ

捨てたはずの

靴下の赤い片一方が

いまサイドテーブルの上にある

※1は生者のために。2は28年前殺された小尻知博記者のために(1987年5月3日没)。3は仏文学者小島輝正さんに(1987年5月5日没)。

◆土・ふくしまの

上野都

ハチの一刺し  
それで決まった  
ディストピアの社に降臨した飛行型のふくしま

どこにでもあるから すぐ爆弾になる  
そこにさえ行けば

どこにでもあるのだが  
社には不似合いな放射性標識

△マークのあれ  
アルファ線、ベータ線、ガンマ線の

黒い三つ葉が書いてあるやつ  
おっとり刀の神官たちが こわごわと取り囲み  
捕えてみれば  
こいつ 土を携行したD・r・o・n・e

「はんげんばつ」は 納得するが  
収まらないのは ふくしまの土  
社では一掴みで命を取られるものを  
野積み 山積みに打ち捨てられ  
「人が住めない地域」に累々と そう死屍累々と  
花も咲かずに

土一掬いの懲役と  
半減期30年のセシウム137の  
つまりは日々 牢獄の無い終身刑が  
永遠につづくチェルノブイリなら300キロ圏  
みずほの国なら信濃あたり

放射性降下物とは まさにD・r・o・n・e  
骨も埋められないほど分厚く積もった  
ふくしまの無残  
みずほの怨念  
だれかが きずなとか がんばれとか

ハチの一刺しは効いたか  
毒は回ったか  
あれからブンとも羽音もせず  
ふくしまの土に葬られたか  
ひさいちは まけないとか でも。

# うた 神戸詞あしび

91-2015.05.24 大橋愛由等



木澤豊さんの山荘(岡山県新見市)

## 詩人の山荘にあつたもうひとつの私

その場所、その光景をみることで、一気に自分のあり方や、来し方が見えてしまうことがある。

五月一日に詩友たちと訪れた詩人・木澤豊さんの山荘(岡山県新見市)を訪れた時も、そうしたために似た感慨におちいる機会になったのである。

限界集落を突き抜けたまっただきの中国山地のただなかにこつ然と現れた別荘地にその山荘はあつた。こぶりな平屋建てで、どこか立原道造が設計した「ヒアシンスハウス」を思いおこさせるような簡明な造りである。

周囲は背高かな木々に覆われ、ほどよい距離を置いて、山

荘が点在し

ている。夜になると、キツネが鳴く。草むら歩きと、落ち葉のじゅうたんに、低反発のマットレスの上を歩いていくようで快感である。

木澤さんはこの山荘を永年にわ

たつて使用しつづけ、詩作と思索の場としてきた(インターネットが使えるので情報格差は感じられない)。室内には壁一面に書棚が設えられてあり、詩に関する本を中心に並べられている。かつて島めぐりをしてきた経験から、沖繩・奄美関係の書籍も書棚の一角を占めている。そのなかにわたしが編集担当した文芸書(藤井令一著『南島文学序説』海風社)を見つけた。よもやこうした山間地でわたしのかつての仕事と巡りあうとは思っていなかった。

巻頭で記した感慨が生まれたのは、こうした出会いが刺激したのであろう。自分が編集担当した書籍は一ページごとになつかしみを覚え、本のカバー、帯、見返し、飾り扉、表紙といった体裁を、装幀家とともに造っていった職人的な手触りの記憶が蘇ってくるのである。出版という仕事は本という形になったあと、こうしてさまざまな場所に移動・拡散するという宿命を担っていることをあらためて確認したのである。

出版編集者として連綿と本を作り続けたわたしであるが、大阪と神戸とといったふたつの街から離れることなく、その都市の吸引力に引きつけられたまま生きてきた人生の来し方が、キツネの里にある詩人の山荘の書架に収まっている一冊の本によつて、あらわになったのである。つまりわたしは木澤さんのような山荘という(もうひとつの場所)居場所(所)を持たなかったということの意味する。這いつくばって生きてきたというほど、へばりついた生き方ではなかったし、「所」にこだわるつもりもなかった。日常の光景は限られたモードの中にあり、その日常性を深化しようとしてきたつもりだったが、それを心の中で(もうひとつの場所)であると思いなそうとしていたのかもしれない。

森閑という言葉がそっくりそのまま形になったその別荘地。わたしの「分身」としてキツネの声を聴いてきたその編集担当本が、わたしに(もうひとつの居場所)はどこにあるのかを問いているような気がしているのである。

詩と評論

月刊「Mélange」Vol.102

神戸

2015年05月24日 通巻102号

発行所/月刊「Mélange」編集部

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F

編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)

maroad66454@gmail.com

定価 600円(税込)